

対馬における学校統廃合

岩田 耕平

1. はじめに

今回の対馬アクションリサーチの目的は、学校の統廃合が地域へもたらす影響を明らかにすることであった。5日間の対馬市の学校教育に関するヒアリング調査のうち、本報告は4日目・5日目の豊地区・佐護地区でのヒアリング調査の内容を、学校と地域のつながり、学校統廃合について、統廃合後の地域の3つに絞ってまとめる。

2. 学校と地域のつながり

まず1つ目の学校と地域のつながりについて記したい。対馬市上対馬にあるスポーツシップ、ヤングスポーツの武末俊紀氏は現在、比田勝小学校で、地域のことを子どもたちに話している。その小学校の前任の校長先生が歴史に興味があり、子どもたちに地域の歴史を教えられる人を地域内で探していたことが、武末氏と学校のつながりが生まれるきっかけとなった。武末氏は「子どもたちと接するようになると、私みたいな存在が非常に大切だと思った。歴史だけでなく野菜作りに詳しい人など、地域の人たちを学校がうまく取り込むと学校と地域のつながりが強く大きくなって、子どもたちの現状を知ることができるからお互いに良いのではないかと思う。」とおっしゃっていた。また、30年以上前に学校のPTA会長を務めていた阿比留哲実氏も、現在も学校とのつながりがある。学校が学校農園として阿比留氏の土地を借りており、そこでイモ植えなどがあるときに阿比留氏が畑を耕したり、子どもたちにアドバイスをしたりしているそうだ。このように、地域の人たちが学校の授業を通して子どもたちに何かを教えるという形で、学校と地域のつながりがあるようだ。

阿比留氏へのヒアリングを進めていると、上記とは別の形で学校と地域のつながりがあることが浮かび上がってきた。学習発表会や運動会など、子どもがいなくても案内が届き、学校のイベントには多くの地域の人に参加するそうだ。さらに、元佐護地区総区長の平山美登氏は「佐護の運動会ゆうたらみんな集落で行きよったとですね。全員集合。この地区なんかはほとんど行きよったですね。自分の子どもがいなくても。」とおっしゃっていた。このように、地域の人たちが学校のイベントに集まるという形で、学校と地域のつながりがあるようだ。

3. 学校統廃合について

近年、全国的な少子高齢化が進行する中で、財政の逼迫化や市町村合併による自治体再編による行政の効率化等の要因とも相俟って、小中学校の統廃合が改めて推し進められている(西村 2014)。もちろん、対馬市も例外ではない。ここでは、4日目・5日目にヒアリ

ング調査を実施した豊地区・佐護地区の学校統廃合の事例を挙げていく。

①豊地区の事例

2011年4月1日、対馬市立豊小学校に併設の対馬市立豊中学校が対馬市立比田勝中学校への統合により閉校した。

私たちはヒアリング調査4日目に、平和学習に参加するために豊小学校を訪れた。校舎の正面玄関には「対馬市立豊小中学校」とあり、豊中学校が併設されていた名残を感じた。

②佐護地区の事例

2013年3月31日、対馬市立佐護小学校・中学校が対馬市立佐須奈小学校・中学校への統合により閉校した。

佐護小学校・中学校の統廃合には、元佐護地区総区長の平山氏が区長として関わっていた。廃校の話の発端は、役所からの中学校の統合の要請であった。廃校について保護者との話し合いの中で、生徒の父親のなかには廃校に反対していた人が何人かいたが、母親は全員が廃校に賛成していたようだ。「ところがその構成見たら佐護出身の人は一人もいなかった。要するに佐護の愛着がないんですよ。」と平山氏は指摘していた。

話し合いを進めるにあたって、保護者を中心にしたことには理由があった。平山氏は「結局は佐護地区に話をかけるかどうか迷ったんですよ。だけど、佐護地区にかけたら絶対反対するっちゃう、地区の住人に(声を)かけたらなくなることに對して全員反対することはわかってるじゃないですか。保護者以外の人だったら学校が統合してなくなるっちゃうことはもうそれ自体だめっちゃう考えを普段持つてるから、これはまともらないなと思ったから、父兄を中心にして話をしたとですよ。」とおっしゃっていた。さらに、「俺は中学校だけと思ってたらいきなり小学校も一緒につっちゃうか。理由がまたすごいとでもんね。小学校離しとったら今度中学校いったときに新しいメンバーになるから馴染めんかったらいけんからって。そこも聞いたんですよ。なんで小学校までも統合せんといかんのかと聞いたときに、学校の図書館でもうざっくばらんに言い合ってますよ。そしたら最終的には子どものことは父兄が決めるみたいなかんじで団結されてしもうてですね。やりかたが悪かったかなと思うて。」とおっしゃっていた。このような話し合いの結果、中学校だけでなく小学校も廃校になったという。

③対馬市役所の見解

対馬市の学校統廃合問題について、対馬市長の比田勝尚喜氏は「地域の方達はむしろ学校を残してほしいと言われるのですが、ただ肝心の保護者というものはやはりもう少し大勢の子どもをなかで育てたいという希望もあるもんですから」とおっしゃっていた。

一般的に、学校統廃合を進める理由の一つに行政側の財政問題があげられる。確かに、統廃合を進め学校を減らしたほうが運営費や人件費などが少額に抑えられる。このような理由からか、対馬市役所側からは学校統廃合問題をどうにかしようという意思は感じることはできなかった。

4. 統廃合後の地域

では、統廃合となり地域に学校がなくなったらどうなるのか。小学校も中学校も統廃合となった佐護地区を例に挙げたい。平山氏は「俺たち子どもを持たない住民にとってみれば、子どもの声が全然聞こえんけです。佐護の子どもが通学するから道を綺麗にしましよとか、子どもが遊ぶから海も綺麗にしましよとか、ちゅう話を結構頻繁にやってたんですよ。それがなくなってしまったちゅうとちょっと変やけど、子どもがいないというので、名目がなくなったみたいなかんじになって。」と地域住民の意識の変化を述べていた。さらに、「地域を団結させるときに学校の存在ってのはすごく大きくて、学校でまとまらない地域ちゅうのは、なんかまとまる物をもっとかんと、地域の集まりが全然なくなって話も全然できない状態になって、今実際こうなってきた。」と地域に悪影響が出てきたことを指摘していた。

5. 考察

今回のヒアリング調査を通して、学校と地域住民につながりがあることを明らかにすることができた。特に運動会などの学校のイベントに、子どもを持たない地域住民が参加していることは、首都圏にはない地方ならではの学校と地域につながりであり、象徴的な地域の集まりである。このまま学校統廃合が進み、豊地区からも学校がなくなった場合、佐護地区と同様に地域の集まりがなくなってしまうと考えられる。このような事態を防ぐためにも、大学が地域に入り、地域に学校が必要であることを唱える意味があるのではないかな。

6. まとめ

5日間の対馬市での学校教育に関するヒアリング調査のうち、4日目・5日目の豊地区・佐護地区でのヒアリング調査の内容を、学校と地域につながり、学校統廃合について、統廃合後の地域の3つに絞ってみてきた。今後、少子高齢化による人口減少によってますます学校統廃合が進むと考えられる。もし統廃合によって地域から学校がなくなっても、地域の集まりはなくさないようにすることが大切なのだろう。

5日間という短い期間ではあったが、その間にたくさんの人に出会い、お話を伺い、様々な場所を訪れ、多くのことを学ぶことができた。学校を中心にした地域創生・学校を通じた地域学習と、実習のテーマが定まっていたため、実習を通してESDの活用方法を知り、ESDについて理解を深めることができた。現地を直接訪れて、ヒアリング調査を通して地域創生について学ぶことができる機会はあまりないため、貴重な経験になった。

【参考文献】

西村吉弘, 2016, 「学校統廃合の地域の位置づけとその課題」, (2018年3月10日取得
https://www.nier.go.jp/kankou_kiyou/143-

302. pdf#search=%27%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B5%B1%E5%BB%83%E5%90%88%E3%81%AE%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E4%BD%8D%E7%BD%AE%E3%81%A5%E3%81%91%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E8%AA%B2%E9%A1%8C%27).

(いわた・こうへい 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)